

---

# 血を乾し、血を汲む(BLEACH)

南条武都

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

血を乾し、血を汲む（BLEACH）

### 【Nコード】

N4952F

### 【作者名】

南条武都

### 【あらすじ】

あの男は私の運命だった。あの女は俺の過去だった。BLEACH  
H・剣八とオリジナルキャラ、過去のお話。（自サイト掲載）

## 女の場合

その男の手は、まるで全てを握りつぶしてしまうかのように強力じうじきで、皮膚の下で炎が燃えているかのように熱く。

その手の触れた同じ場所を貫かれるまで、熱は私の中に残っていた。

それまで耳を聳するほどの声に満たされていた練兵場は、その声が頭上の青空に吸い込まれたかのように、しん、と静まり返った。黒装束の男も女も全てが息を潜め、瞬きさえすまいというように目を見開いて、一心に見つめている。

その突き刺さるような視線を感じ、私はしかし、煩わしい外界を全て断ち切って、ただ目の前の男を睨みすえた。

男は、更木剣八。

盲目の死神・東仙はこの男を危険視し、十二分に注意するようにと試合前に警告を超越してきた。が、私は更木の性を、どうこう言うつもりは無かった。

更木は抜き身の刃そのもののように、血と戦いを欲する男だ。虚だけでなく死神にさえ牙を剥き、時に己の身を省みることもせず、刀を振るう様は悪鬼のようだったが、それをいえば、私とて同じようなものだと思う。

何の呵責も無く、ただ命ぜられるままに全てを屠る、この身なれば。

男が私室に押し入ってきたのは、深更の事だった。

明日に試合を控え、常通り書類を片付けていた私の部屋の障子を、更木は突然払いのけて入ってきた。霊圧を隠す事が不得手な男だから、予めその来訪に気づいてはいたものの、私にはその意図が掴めなかった。

夜討ち朝駆けのような、相手の不意をつく戦法を、唾棄するが如く嫌う男だ。まさか騙し打ちではあるまい、と向き合った私に、更木は言った。

「あんたを抱かせろ」

更木の言葉を理解するまで、時間がかかった。ようやく意味が脳に達したのは、畳の上に押し倒された時で、流石の私も一瞬焦りを覚えた。

私は女の中でもさほど背が高くない方で、更木は男の中でも背が高い方だ。更木の、肉の削げた体は細いが弱弱しさは感じず、私の一回りも二回りも大きい。

「何を、するっ！」

力では敵わない。声を張り上げると、更木はこちらの顔を覗き込んできた。女を手折る無粋な男のように、劣情で息を荒げていたわけではない。妙に平静な、それでいてこちらの身を貫くような鋭い光を目に浮かべて、

「明日、俺かあんたのどっちかが死ぬ。最後の夜くらい、惚れた女の思い出が欲しいじゃねえか」

低い声で言った。

私は、動きを止めた。

刃のこぼれた斬魄刀を無造作に構え、更木もまたこちらを睨みすえていた。隙だらけのようできて、その実切り刻まれそうなほど圧迫感のある霊圧が噴き出しているのが見える。私は自分の刀を引き寄せて、目を閉じた。

始解では敵わない。最後の一太刀まで、息の根を止めるつもりでかからなければ、負けてしまう。

十一番隊隊長の座がかかっているから、ではない。私は剣を持つ己のために、この男を殺さなければならぬと思った。この男を殺し、己が生き延びる事、それが全てだった。

死神は斬魄刀の名を知り、開放する事で更なる力を得る。更木は斬魄刀の開放が出来ない。否、そもそも封印が出来ない。故に、死神には常に軽蔑され、侮られ続けた。

彼が最強の死神に与えられる剣八の名を名乗っていたから、余計に目立っただろう、その噂は護廷十三隊にも聞こえてきて、私の耳に入ったほどだった。

最悪の事態は、更木が瀟霊廷にきて、すぐに起きた。

それまではどんな謗りを受けようと、更木は頑として無視し続けていたという。彼がまるで相手をする気が無いと分かって、口惜しかったのかもしれない、更木にちよっかいを出していた十一番隊の者達は、標的を変えた。彼と共にあった少女をかどわかし、私刑に処そつとした。

隊員からの報告を受け、現場に駆けつけた私は立ちすくんだ。怪我ひとつない少女を肩に乗せた更木は、私刑に関わった者達、唆し面白がつて見物していた者達を、皆殺しにしていたのだ。

辛うじて息のあった者の鎖結に刀を突き立て、頭から足元まで血にまみれた更木は、まるで滾る闘志の行き先を求めるように、熱の揺れる目で私を見た。

私がつさに腰の刀を抜いたのは、更木の発する霊圧に圧されたからだだった。一息で跳んだ。懐に入った途端、振り下ろされた白刃を手の甲で弾き、同時に自分の刀を前方へ突き出した。

鈍い衝撃と共に更木の腹へ食い込んだ刀が、骨に当たって止まる。だが、更木は止まらなかった。刀の柄を私の手ごと握り、弾かれた自分の刀を手元に引き寄せ、私の首筋に下ろした。首に触れる血に濡れた生ぬるい感触に、私は己の判断が誤っていた事を知った。身動きが取れない。殺られる。

そう思った時にはすでに体が反射的に動いていた。空いた左手で更木の斬魄刀の刃を掴み、渾身の力を込めて握る。刀を引こうとして、それが微塵も動かぬ事に驚いたのか、更木は目を見開いた。

暫時、互いの視線がぶつかる。間近に迫った互いの顔が視界を占

め、互いの息が絡み合う。

更木の薄い唇が横に引き、笑みを形作った。背筋に冷たい悪寒が走り、ついで熱が駆け下りるのを感じて、私は我知らず震えた。

この、男は。

白刃が震え、鳴き始めた。私は刃を床に向け、ついで突き刺した。体の底から霊圧が噴き上がり、陽炎のごとく私の周囲を踊る。私は霊圧の幕越しに更木を見ながら、宣告した。

「飲め、蛇神じゃがみ 卍解」

びき、と砕ける音が連鎖的に起こり、練兵場の石畳をめくりあげ、土と岩がどう、と音を立てて突きあがった。空まで高く巻きあがった土柱が、蛇の形を成して私の周りに渦を巻く。蛇は一度吠えるようにのけざると、無数の矛と共に更木に向かって突進した。

更木の寝顔をしばらく眺めた。この男が、人を前にして眠る、その事自体が、不可思議な事象のように思えてならない。

私は更木の腕をどかして寝床から抜け出すと、単ひとえのまま、障子を開けた。ひんやりとした夜気が体を包み込む。それが部屋にまで入り込まぬようにと、廊下に出て閉めた。そして、草履を履いて庭に降りる。

夜空は、晴れていた。雲一つなく、傾いた月がまぶしいほどの光を反射している。冷たい風に自分の体を抱きしめて、私はふと手を見下ろした。

手首に、指の跡がうつすら残っている。握りつぶそうとするかのように力を込めた、更木の指の跡。

『惚れた女の思い出が欲しいじゃねえか』

あの言葉以降、無言のまま抱き合ったのは、なぜだろう。

これまで、更木が私を好いているような様子を見せた事など一度も無かったし、それは私も同じだった。更木を男として見た事さえ無かった。

それなのに、暴力的といって良いほど乱暴に私を組み伏せた更木に、なぜあれ以上、抵抗しなかったのか。

「分らない」

呟いて、その言葉の意味を実感して、ついで愕然とした。なぜだろう、私は、分らない。自分の事なのに、自分の事が分らない。これまでは、命ぜられるまま、規律に従って動いていれば、それで良かった。そこに私情を入れる余地など無かったから、考える必要は無かった。自分の行動が是か非か、どういった理由により生じ、どういった結果をもたらすか、疑問に思う事など無かったのに。

私はあざを掴んだ。手が、震えている。

息が切れてきた。これほど長い間、正解をし続けた事が無いから、徐々に制御が出来なくなってきた。

鋭く尖った岩の矛が何本も突き刺さり、更木の体を傷つけていく。だが、更木は退かなかった。退く事など思いつきもしないように岩を粉々に砕き、前進してくる。私は直前にまで迫った更木の刀を、蛇神の体で受け止めた。

がき、と重たい音がして、蛇神がきしむ。厚い岩の壁は、解放もしていない更木の斬魄刀では打ち破れない。そのはずだった。

だが、息することさえ忘れるほど長い拮抗の後、ひび割れたのは蛇神の体の方だった。目の前で岩に無数の亀裂が走り、蛇神の悲痛な叫びが耳をつんざく。馬鹿な、と思う間もなかった。

あつけないほど簡単に蛇神の胸が二つに割れ、その向こうから鋼が突進してきた。それは過たず、私の魄睡<sup>はくすい</sup>を貫いた。

「あぐっ……！」

かつて、現世で死した時とは比べ物にならない激痛が全身を駆けめぐり、悲鳴が喉に詰まる。更木の斬魄刀をつかみ引き抜こうとするが、手に力が入らない。熱いものがこみ上げてきたと思ったたら、ごぼ、と口から血が溢れた。

「……っ」

死ぬ。死ぬのか。かちかち鳴る歯を食いしばり、私を殺す男を見上げる。更木は私を見ていた。

初めて刀を交えた時、そして昨夜肌を合わせた時と同じように、息がかかるほどの距離で互いの顔を見つめる。私は驚いた。私たちは試合ではなく、殺し合いをしている。そのはずなのに、更木の顔には満悦の笑みが浮かんでいる。更木の瞳に映る私も、笑っている。死ぬんだな。これで。

絶望ではなく、静かな歓喜が全身を満たしていく。私は、もう一度血を吐いて、膝を折った。蛇神の崩れていく轟音と衝撃が耳をつんざく。指先から、ほどけていくような感覚が広がっていった。

「剣八」

声にならない声で名を呼んで、私は更木の斬魄刀を握んだ手を引き寄せる。もはやそれは痛みではなく、悦びしかもたらさなかった。



## 男の場合

つまらねえ女だ、と呟いた。血を吐いて、倒れたその姿を見て。

俺がその女を初めて見たのは、生きていた時だった。正確に言う  
と、死に掛けてた時だった。

俺は化け物に襲われて、何が何だかわからねえうちに殺された。  
無様に倒れた体と繋がる鎖を切られ、足先から溶けていくような  
脱力感と、喉に綿を詰め込まれたような息苦しさ悶えている時、  
黒い装束の連中が俺の前に現れた。

そいつらは、天をつくような大きさの化け物を取り囲み、その動  
きを封じた。黒い連中の中央に立ったその女が刀を抜くと、得体の  
知れない圧迫感が俺を襲った。

女は、地面を蹴った。空に浮かんだ女は、刀で無造作に、化け物  
の面を左右に斬り割った。

身の毛もよだつような絶叫をあげて、化け物がのたうち回った。  
そして、端から砕け始めた。女は、もうその存在を忘れたかのように  
化け物へ背を向け、俺を見下ろした。

ぶれる視界の中、俺はその女を見上げた。日の光を背に負った女  
の顔は良く見えず、表情の無い、無機質な目だけが俺を見下ろして  
いた。

視線はすぐに外された。他の黒装束の奴が女の声に駆け寄ってき  
て、刀を抜いた。

そこで、俺の記憶は一度途切れる。

女が瀟々たるにいる事を知ったのは、尸魂界に来てだいぶ経ってか  
らだった。その時すでに更木を出ていた俺は、それを知って、死ぬ  
前に見た光景をまざまざと思い出した。

呼吸をするよりも簡単に、虚を切り伏せた女。現世でいくら勇名

を轟かせようと、俺はあんな化け物と対峙したことはなかったし、それをあっさり倒してしまうような遣い手にも会ったことがなかった。

あの女なら。あの死神となら、楽しい斬り合いが出来る。

胸が高鳴った。あの女に会いたいと思った。

願いは、さほど困難もなく叶った。入隊試験なんて面倒な事をするつもりが無かった俺は、現隊長との一騎打ちを志願した。そこで出てきたのが、あの女だった。女は、俺が目指していた護廷十三隊の一隊長だったのだ。

女は、俺を見た。だが特に反応も示さず、淡々と申し出を受けた。俺のことなど覚えていなかったのだろう。

だが、そんなことよりも俺を打ちのめしたのは、女が、俺の期待したほど強い奴でなかったことだ。

俺は霊圧の読み方など知らない。だが、自分のそれと比べて、女の霊圧はどう見ても低かった。あの時の圧倒的な強さなど、幻想のようだった。

女が弱くなったのではない。俺が強くなったのだ。これでは斬り合っても、女はすぐに壊れてしまうだろう。

俺は女への興味を失った。女は、俺が護廷十三隊に入るための、捨て駒でしかなくなった。

刀を抜いた女を再度見たのは、その後だった。

一ヶ月後の試合を控え、宿に泊まっていた俺とやちるに、死神達がちよっかいをかけてきた。

羽虫を相手とっても楽しくないので無視していたが、連中はやちるを攫った。女が期待はずれでくさくさしていた俺には、喧嘩のいい口実だった。

俺はやちるを迎えにいった。喧嘩はつまらなかった。やちるにさえ劣るような連中と角付き合わせたところで、手ごたえがあるはずもない。

あつという間に死体の山が出来上がり、俺は中途半端に盛り上がった闘志の置き場を求めて、視線をめぐらせた。その時、あの女が来た。

目が合った途端、女の体から霊圧が噴き出した。殺気に圧倒され、俺の全身に鳥肌が立った。女の体が跳び、目にも止まらぬ速さで俺の懐へ飛び込んでくる。

俺は刀を振り下ろした。だが、ガンツと重たい反発を受けて刀が弾き飛ばされ、女の刀が、さっきの連中には傷一つつけられなかった俺の腹を切り裂き、半ばまでぐった。

しかしそこで、刃が骨に引っかった。すかさず、柄ごと女の小さい手を握りこんで動きを縫いとめる。不覚を悟って一瞬体を強張らせる女。俺は弾かれた刀を、今度は女の首に向けた。首は、刃で切らずとも霊圧の衝撃で飛びそうなほど細く見えた。

刃に女の皮膚の感触を覚えたその瞬間、女は俺の刀を掴んだ。俺は反射的に引こうとしたが、刀は微塵も動かない。力が拮抗する。

俺は女を見下ろした。女は俺を見上げた。目が合う。色づいた唇からもれる弾んだ息が顔にかかる。それに、俺の口からもれる荒い息が絡む。

この女、弱くはない。どころか、紛れもなく俺の敵になれるだけの圧がある。俺は楽しくなってきた。女はそれを見て、初めて顔をゆがめた。

喧嘩の仕舞いはあつかなかった。駆けつけた死神どもがよってたかって俺を押さえつけ、牢に放り込んだ。

だが、なぜかすぐ釈放された。迎えに来たやちるが、得意げに女を紹介した。俺が出られたのは、女の力添えがあつたからだという。「何で助けた？」

問いかけると、女は冷たい目で俺を見上げ、「私の部下の非だ」

そっけなく言い捨てて立ち去った。やちるを攫い、俺が殺した連

中が、女が隊長を務める十一番隊の奴らだという事は、後で聞き知った。

女は、女だという理由で、下の奴らから突き上げを食らっているようだった。俺のような輩に喧嘩を売られるのも、そもそも女が隊長に相応しくないからだ、と責められていたらしかった。

女は、そういう陰口や侮蔑を、全て聞き流していた。実際、女の力は部下の不満を押さえつけられるだけのものだったから、聞き流す事が出来たのだろう。

いつ見ても、女は毅然と顔をあげ、全てのものを拒絶するような眼差しで前を見ていた。人形のように無表情のまま行く女を見て、俺は齒がゆかった。

あれだけの力があるのに、なぜあも無気力に生きるのか。文句を言う奴を全て叩き潰せば、それで済むのに。

俺には理解できなかった。理解したいとも思わなかった。ただ気にかかった。気にかかって、夢まで見た。

女が背を向けて立っていた。手に刀を持ち、黒い着物に身を包み、そこに立っていた。俺は女を呼んだ。何度も呼んだ。声が枯れるまで呼んで、手を伸ばした。女は振り返ろうとした。顔を動かし、じれったいほどゆっくり、振り返ろうとした。

そこで、目が覚めた。目が覚めた時、思わず寢床から跳ね起きた。辺りはまだ闇の中だ。やちるが部屋の隅まで転がって眠っているのが見える。

夜が明ければ、待ち望んでいた一騎打ちだった。俺は布団を蹴飛ばして部屋を出、まっすぐ女のところに向かった。

出入りを咎める門番をのし、幾度かやちると辿った道を進んで、女の部屋の障子を開ける。

深夜にも関わらず書き物をしていたらしい女は、驚きもせず、膝を揃えて俺に向き直った。行灯の火が揺れて、女の目の影が濃くな

る。俺は何かに追い立てられるように部屋へ踏み込み、女の手を掴んだ。

「あんたを抱かせろ」

女の体は小さかった。女にとって俺は大きすぎた。だから、俺が攻め立てれば攻め立てるほど、女は快樂の嬌声ではなく、苦痛の悲鳴を上げた。だが、女は逃げなかった。初めて聞く女の声で、初めて見る女の顔で、俺とまぐわった。

俺が眠りから覚めた時には、女はすでに身支度を整えていて、  
「帰れ。夜が明ける」

短く言って俺を追い出した。宿に戻った俺は、朝飯をかつこみ、背にやちるを負って、瀟靈廷へ向かった。

女はもう来ていた。隊員二百名がざわめく練兵場の中央に立って、俺を待っていた。

女の背後に青い空が広がり、太陽の光が差す。陰に落ちた女の顔は見えない。ただ、その表情の無い、無機質な目が俺を見ていた。  
めまいがする。あの日に戻ったような気がした。

踏み込む。斬る。跳ぶ。切り結ぶ。離れる。

互いの刀が重なるたびに、霊圧が爆せて周囲に衝撃をまき散らす。逃げまどう見物連中の悲鳴を蹴散らして、俺達はぶつかりあった。振り下ろした刃が、女の肩口から脇腹までを切り裂く。背後に回った女の刀が、俺の背中を貫く。火花が散り、血が空に剣の軌跡を描いた。

女の霊圧は、明らかに上がっていた。ぶつかればぶつかるほど、その圧が高まるのが俺にも分かった。だから、俺の血は滾たぎった。こんな喧嘩は、久しぶりだった。現世以来、いや、かつてないほどわくわくする喧嘩だった。

女の蹴りが俺の顔に入る。俺の拳が女を吹き飛ばす。吹っ飛ばされて、空で回転して着地した女は、へどを吐いた。

「来いよ！」

血と一緒に、折れた歯を吐き捨てて、俺は吠える。来いよ。お前はそんな程度じゃねえ。もっと、もっと、俺を楽しませろ。

女は口をぬぐい、俺を見た。ずっと背筋を伸ばし、目を閉じて息を整える。

耳を突くような甲高い音が、周囲を圧した。女の中で潜んでいた霊圧が膨れ上がり、烈風さえ伴って渦巻く。陽炎のように揺らめく霊圧の壁の中で、女は刀を地面に突き刺して言った。

「飲め、蛇神じゃがみ 卍解」

『惚れた女』

女を押し倒して、その目を見て、すべり出た言葉が、俺を縛った。そうか。俺はこの女に惚れてるのか。

そうと気がついた時の衝撃は、感動的と言って良いほどだった。

惚れた女が、自分と対等に戦えるだけの力を持っている事が、必要以上に俺を喜ばせた。

だが、その喜びはいま跡形も無い。俺の刀に腹を貫かれた女は、血を吐いて倒れた。それまで生きているかのように動いていた岩の蛇は急に力を失い、がらがらと砕けた。周囲に満ち満ちていた霊圧が、瞬く間に消えていく。

肩に突き刺さっていた岩の槍を砕いて、俺は女の側に膝をついた。女は動かない。

「おい。もう終わりかよ」

責めるように言っても、女はぴくりとも動かない。

あと少し。あと少しで、女はその目に、熱を帯びるはずだった。戦う事を楽しめるはずだった。我知らず笑みを浮かべた口から、歓喜の声を吐き出すはずだった。

だが、こいつは最後の最期で、喧嘩を楽しむどころか、自分で命を捨てやがった。死ねる事を喜びやがった。あと、もう少しだったのに。

「つまらねえ女だ」

吐き捨てて、俺は女の羽織をひっぺがし、肩に羽織った。菱形に十一の字が入ったその羽織には女の血がこびりついて、甘い匂いがした。俺は、駆け寄ってくるやちるを見、そっちへ足を踏み出しかけて、立ち止まった。俺の名を呟いた女の声が、耳に蘇った。

俺は肩越しに振り返り、

「」

その名を、呼ぶ。

だが女のいらえは、もう永遠に無かった。

## 男の場合（後書き）

剣八の過去話がそのうち出てきそうなので、先手で十一番隊の先代<sup>オリ</sup>隊長との対決を書いてみました。書いたもん勝ち。  
相手の女も剣八も強くなさそうですが、まあ剣八も若くて、今ほど強くはなかった、ということでは…。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4952f/>

---

血を乾し、血を汲む(BLEACH)

2011年8月15日03時24分発行